

緒言

全世界を巻き込んだコロナ禍は、全ての年齢層の人々の生活に大きな影響を与えた。安全で安心できる生育環境の中で、一人ひとりの子どもが持つ可能性を十分に伸ばすことのできる社会を目指すものにとって、コロナ禍は大きなチャレンジであった。

子どもの安心、安全に係る資質の中で近年注目されている Resilience（レジリエンス）に、コロナ禍がどのような影響を与えているのか、またどのような環境が子どもの Resilience（レジリエンス）の向上につながっているのかを明らかにすること、さらに、子どもの生活が安心・安全なものであり幸福感（happiness）をどの程度感じているかを示す QOL（quality of life）と Resilience との関連を明らかにすることが、本研究の目的である。

今回の調査で5歳児と7歳児が対象として選択されたのは、保育園・幼稚園に通う幼児と、小学校に通う児童を対象とすることによって、暦年齢の差による両群の差だけでなく、遊びを中心とする保育と、教学的な環境が主となる学校教育の差を検討するためである。

質問紙調査の報告の前に、Ⅰ部において日本における保育と学校教育について概観し、続いてⅡ部でアジア8カ国の研究者、教育者との議論の中で確認された上記課題について、日本で行われた5歳児と7歳児を対象として行われたアンケート調査の結果（カンントリーレポート）を報告する。

Ⅰ部 コロナ禍における日本の保育園、幼稚園並びに小学校の実情と課題

1-1. コロナ禍の保育園・日本の現状

本原稿を執筆している今（2022年2月）、日本は第六波に襲われており、2月3日の休園数は777園に上り、それ以前のピークの4倍以上といった現状になっている。よって、第六波をめぐる調査結果はこれまでと異なるものとなることが予測されるが、ここでは、本調査が実施された2021年8月～11月ごろ、つまり、日本では、同8月から9月のころ第五波のピークであった時期やそれ以前の状況について、これまで刊行されている各種調査結果（全国私立保育連盟、2020；2021、全国認定こども園協会、2020；全国保育園保健師看護師連絡会、2020；こども環境学会、2020等）の報告書によって指摘されている事項を元に、コロナ禍における日本の現状について概観したい。

先にあげたように、第六波による休園数は大変多いが、加えて、各地で登園自粛の要請もなされている。以前の緊急事態宣言下においても、各地で行政から登園自粛の要請がなされている。それに伴い、各園では多くの新たな工夫がなされた。以下紹介したい。

（1）保護者支援の工夫

全国私立保育連盟の調査「『新型コロナウイルス感染症に関する調査2』～第1波感染期間を振り返る～報告書」（http://www.zenshihoren.or.jp/pdf/tyousa_20200728.pdf）では、2020年3月から5月に登園自粛家庭に対して園が行った支援等は、多い順に「自粛家庭に対する電話・メール等での安否確認」（73.3%）、「施設からの情報発信（紙媒体）」（69.4%）、「施設からの情報発信（HP）」（32.2%）、「施設からの情報発信（アプリ）」（32.2%）、等の情報発信、「電話等の相談窓口の設置」（22.5%）等、保護者のメンタルヘルスを支えることが試みられている。なお、各種調査では、コロナ禍にあって、保護者支援の必要度が増したこと、またそれに対する保育者の業務負担感が高くなったことなども報告されてい

る。その支援の拡充を園が実施し、家庭を支えていることが分かる。

実際に、各種調査ではコロナ禍にあって、保護者との連携への職員間の意識が高まり、共通認識を図ろうとする試みや一体感が生じた、実際の連携も多様で豊かになって、保護者との関係性が改善したといった好事例も多数報告されている。

（２）保育内容に関わる工夫

コロナ禍において多くの園が保育の工夫を行っている。日常の保育においては、三密を避けるために集会場面の在り方を変え、座り方を変えたり、少人数グループの活動を増やしたり等の工夫がなされている。食事の折の亚克力パネル設置や会話の制限が多くの園でなされている。一方で、マスクの着用や、スキンシップの制限については、積極的ではない実態がある。

保育内容については、これまで通りの遊びや生活を保障している園がほとんどであるが、園外保育や、保護者会等は中止となった園が半分近くあった。なお、集会を伴うが子どもたちの育ちの記念となるような入園式や卒園式、誕生会等は、規模や時間、内容を縮減したり、分散したりといった工夫が施され、実施されている。ICTの活用も伸長しており、動画配信を行った園は12.3%であり、オンラインにより子どもとかわった園は4.2%、オンラインで保護者とかわった園は1.7%であった。

各種報告書では、コロナ禍にあって、日ごろの保育を見直すことができたという報告や、行事の見直しによって子ども主体の保育の工夫が高まったこと、分散登園や小グループ活動により個々の子どもと接する機会が拡充したこと等も報告されている。厳しい中であっても、保育実践現場が実践への工夫を施し、子どもたちのウェルビーイングの推進が図られていることが分かる。

（３）業務改善の工夫

各種調査からは、コロナ禍において、精神的にも物理的にも、業務負担が深刻化したことが報告されている。感染防止対策を通常保育に加えて保育者が実施している実態があり、加えて園に感染者や濃厚接触者が出た場合などの人員不足も深刻となっている。子どもと保育者の体調管理や衛生管理、消毒その他の業務が多忙化している。例えば、2020年9-10月に実施された全国保育協議会・全国保育士会の調査（2020）でも「分散した活動や新しい取り組みのための準備により、保育者の負担増や人材不足が生じているとの回答が多くみられた」と報告されている。

そのような中で、ICT等を活用した業務改善の工夫がなされている。全国私立保育連盟（2021）では、コロナ感染防止対策事例の効果について感じていることとして、例えば、「eラーニング・テレワーク技術等を活用した研修の実施」について「効果がある」と「やや効果がある」との肯定解答は42.1%と34.1%であり、「行政との情報ネットワークの仕組み作り」については27.8%と35.2%、「園から家庭へインターネットを活用した情報発信」については26.3%と31.9%であった。

各種調査では、一方で研修機会が減少したといったデータもみられるが、新たに遠隔研修の工夫を導入し、今まで以上に研修時間が多様になったり個別化するなどフレキシブルとなったり、研修場所への移動時間が不要となったりといった肯定的評価もみられる。

（４）まとめ

コロナ禍にあって、私たちは、アンビバレントな課題に直面しているといえよう。つまり、社会基盤の保障と、子どもの安全確保（命を守ること）、子どもの育ちの保障（通園可能とする）といった様々な課題に直面している。また、前例のない、根拠となるデータもない実態に対応するにあたり、判断は誰がするのか、といった問題にも直面している。さらにそこでは、各種判断に子どもの声をいかに反映させ、子どもの視点に基づくことができるのか、といったことも議論となっている。

コロナ禍における課題については、①保育者や保護者のメンタルヘルス問題、②情報リテラシーの問題、③子どもの権利保障としての幼児教育保障とその質の確保についての問題への対応が、果敢に進められている。①については、虐待や貧困問題も深刻化しつつあるが、個別支援の充実やICT活用等も進められている。②については、子どもを中心に縦割り行政や情報の多元的発信をいかに一体化できるのが議論され、そのための行政改革も今まさにスタートしたところである。③については、人間関係の中で他者と共に育つ子どもの権利保障、自然体験や文化経験の保障への認識が広がり、数々の実践の工夫も積み重ねられつつある。パンデミックをむしろ機会とし、本当に保障すべき乳幼児期の教育について再度確認し、行事の見直しや子ども主体の保育への展開などを図りつつある現場の事例もある。

コロナ禍にあって、試行錯誤の中、多様な工夫がなされている。この機会に、家庭との連携を深めたり、保育システムの一体化を進めたり、園内や地域の保育者の同僚性の絆を強めたり、保育の原点にかえて方法や内容を再検討したりといった、実態もある。日本においては、コロナ禍にあって、果敢にそれに立ち向かう、多くの保育者のレジリエンスが発揮されていると考える。

(北野幸子)

1-2. 日本の就学前教育・保育機関の教育・保育における well-being とレジリエンス

日本の就学前教育・保育の機関は、幼稚園(3～6歳)、保育所(0～6歳)、認定こども園(0～6歳)の3種類がある。日本の3種の就学前教育・保育機関には、幼稚園の「幼稚園教育要領」、保育園の「保育所保育指針」、「こども園」の「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」という、国が定めたガイドラインがある。幼稚園、保育所、認定こども園とも私立が多く、国のこれらのガイドラインを大枠では守りながらも必ずしも忠実である必要はない。したがって、教育方針はさまざまなので、例外も多々あることを前提としながら、調査の対象となった5歳児を中心に、well-being、レジリエンスについての配慮で、日本の園で特徴的といえることを以下に列挙する。

- (1) 幼児(3～5歳児)の教育・保育は、幼児期にこそ育むことのできる能力や性質を教育することが主体であって、小学校の準備ではない。5歳児クラスの特に後半になって、小学校との接続が重視され小学校での基本的な学習の準備がなされるのが一般的である。
- (2) したがって、子どもの自発性、主体性を尊重し育むことは幼児教育の重要なポイントである。
- (3) そのために、遊びを通しての教育が教育の要である。これは幼稚園教育要領では最も重要な点である。遊びを学習の手段としてだけ用いるのではない。子どもの自発的な遊び自体のなかに、思考力や判断力、他者との関係の力を育む教育の要素を構成することである。
- (4) それは遊びを中心とした教育環境を用意することを意味する。大人の直接的な教え・教示ではなく、環境のなかで、また生活のあらゆる局面に、子どもが自ら自分自身を成長させることのできる教育的な要素を入れ込むことによる。
- (5) 同輩との協力や助け合いといった関係が重視される。保育者が設定する協働や助け合いの活動ばかりでなく、生活のなかでの協力、助け合いで信頼関係の構築が促される。
- (6) 教育内容については、自然のなかでの活動は重要である。水・土、砂・木などの自然物を教育活動のなかで使用するのにとどまらず、自然(森、畑等々)のなかに出ていく、植物を栽培する、動物を飼育する等、子どもが身体全体で自然と関わる体験が重視される。
- (7) 行事が多いのは日本の園の特徴といえる。季節の伝統的な行事のなかで、文化の継承とともに、季節の祭りで同輩・異年齢児・大人との楽しく和気あいあいとした雰囲気を共有することは、他

者との良好な関係作りにも役立つ。運動会、展覧会、音楽会などは、目標をもった活動の努力の成果を同輩や家族と分かち合う場でもある。

- (8) 食育は近年、特に給食のある保育所、認定こども園や幼稚園で重視されるようになった。自然で安全な食べ物への意識、食材への関心、野菜の栽培から食卓までの過程の理解、さらには自分たちで野菜を栽培するなど、多彩な活動のなかで、健康と安全な食生活への関心を育んでいる。
- (9) 保育所・認定こども園での家庭支援も近年の幼児教育・保育の重要な役目になっている。また、親が園の教育に協力することは、園の仕事の助っ人になることではなく、園の教育をより理解したうえで園と共同で子どもを見守ることだと認識する園も増えている。保育参観、一日保育者体験などはその一つの形である。

(星三和子)

2. 日本の小学校教育

日本の教育制度は、明治時代(1868-1912)から体系化が進められてきた。特に小学校は早くから全国的な整備が進められ、1900年の無償制の確立により、1904年には男女とも97%の就学率に達してきた。そして、1907年にこれまでの4年間の修業年限が6年間に延長された。このように、日本は、100年以上前から、小学校に関しては完全に就学が定着してきたのである。1945年の第二次世界大戦後の教育改革により、小学校の6年間に加え、前期中等教育である新制中学校3年間の義務化された。後期中等教育である高等学校を含めて、現在でも6・3・3制が初等・中等教育の基本となっている。

明治期から現在に至るまで、日本における小学校における標準的な指導形態は、「学級担任制」(self-contained class)である。音楽等で専科教師が指導することもあるが、基本的に小学校教師は、小学校1年生から6年生まで全ての教科等(表1)を指導している。表1は、2017年に改訂された小学校学習指導要領において規定されているものである。

表1 日本の小学校の教科等一覧

低学年 (1・2年生)	中学年 (3・4年生)	高学年 (5・6年生)
国語	国語	国語
算数	算数	算数
生活	社会	社会
音楽	理科	理科
図画工作	音楽	音楽
家庭	図画工作	図画工作
体育	体育	体育
道徳	道徳	家庭
特別活動	外国語活動	外国語
	総合的な学習の時間	道徳
	特別活動	総合的な学習の時間
		特別活動

授業については、一部の実技教科等を除いて、教科書を用いて指導が進められている。教科書については、教科書検定を通過した検定教科書のみが用いられることになっているのに加え、教科書採択制度によ

り、それぞれの採択地区において一教科一教科書の原則となっており、教師の決定権は極めて限定的なものとなっている。

日本において、教師は教科を指導する以上の仕事が期待されている。学級全体の関係性を高める学級経営、個別・集団に対する生徒指導、学校内での業務を分担する校務分掌、保護者対応、地域との連携といった極めて広範囲な業務を実際に担っている。このような状況が長らく続いてきたが、2019年に学校における働き方改革に関する中央教育審議会答申が出されたことにより、業務の見直しが現在議論されている。

(深見俊崇)

Ⅱ部 カントリーレポート

1. 対象と方法

日本における調査は、対象者である幼稚園（保育園）に通う5歳児、または小学校に通う7歳児をもつ母親に、質問紙とオンラインの2つの方法で実施した。質問紙は17の幼稚園（保育園）に協力を依頼した。オンラインではグーグル・フォームを利用してアンケート回答フォームを作成し、URLを小学校や幼稚園（保育園）に案内し、協力を依頼した。

得られた回答数をまとめたものが表2である。なお、新型コロナウイルス感染症によるロックダウン状況について、調査時の日本においては、5歳児・7歳児ともに8割以上が「していない」と回答している。母親の新型コロナワクチン接種状況は、5歳児・7歳児ともに7割以上が「接種した」と回答している。

・調査方法 質問紙調査（紙／オンライン）

紙調査は、東京都、神奈川県、埼玉県、沖縄県の関係者に調査紙を送付し、依頼した。

オンラインは、愛知県、兵庫県、島根県、岡山県の関係者にURLを案内し、依頼した。

・調査時期 2021年8月～11月

・調査対象 幼稚園（保育園）に通う5歳児、または小学校に通う7歳児をもつ母親

・回答者 5歳児の母親246名（男児111名・女児135名）7歳児の母親114名（男児58名・女児55名）

表2 調査回答者・基本属性

		5歳児		7歳児	
		246		114	
		n	%	n	%
子の性別	1 男子	111	45.1	58	50.9
	2 女子	135	54.9	55	48.2
	無回答	0	0.0	1	0.9
ロックダウンの状況	1 ある	23	9.3	22	19.3
	2 ない	219	89.0	92	80.7
	無回答	4	1.6	0	0.0
ワクチン接種有無	1 接種した	192	78.0	83	72.8
	2 接種していない	52	21.1	31	27.2
	無回答	2	0.8	0	0.0

2. 結論と考察

今回の8カ国質問紙調査には、母親と子どもの属性以外に21項目の様々な因子(変数)についての質問項目が含まれている(表2-1-1)。これらの変数は、CRNAの全体会議での協議を経て、選択されたものである。なおQOLはハピネス(happiness)とほぼ同義で、quality of lifeの略語である。ハピネスを測定する尺度として、様々なQOL尺度が開発されており、今回の調査で使用的是ドイツで開発されたKINDLと呼ばれるQOLの尺度である。

表2-1-1

- Q1 コロナに関わる状況、母親のコロナ意識・不安感
- Q2 子どもの基礎情報
- Q3 登園登校状況
- Q4 保育・教育の状況
- Q5 学校の成績
- Q6 子どものレジリエンス
- Q7 子どものハピネス(QOL)
- Q8 母親の養育態度
- Q9 子どものデジタルメディア活用実態
- Q10 子どものデジタルメディア活用時の保護者のかかわり
- Q11 子どものICT活用に対する母親の抵抗感のコロナ禍前後での変化
- Q12 子どもの日常的な時間の使い方：遊び、デジタルメディア活用等
- Q13 子どもの日常的な時間の使い方：習い事等
- Q14 コロナ禍前後での時間の変化：遊び、デジタルメディア活用時間
- Q15 子どもの遊びの状況
- Q16 母親の子育て意識
- Q17 母親が子育てで力を入れていること
- Q18 配偶者との家事育児分担
- Q19 配偶者と子どもの関係、夫婦関係
- Q20 母親の生活満足度
- Q21 家庭の基礎情報、子育て支援

本項では、子どものQOL(Q7)あるいはレジリエンス(Q6)をアウトカム変数(outcome variables)とし、それに関連のある可能性の高い以下の独立変数(因子)との関連を、分散分析、相関分析、回帰分析などの統計的手法を使って探索的に分析をした。対象とした因子は、表2-1-1にある21因子のうち

- Q1 コロナ禍の状況、母親のコロナに対する不安、コロナ政策への満足度
- Q4 園(5歳)、小学校(7歳)での関わりやサポートへの母親の評価
- Q5 対象児(7歳)の学業成績
- Q8 母親の養育態度
- Q16 母親の子育て意識
- Q17 母親が子育てで力を入れていること
- Q19 配偶者サポート(育児サポート、心理的サポート)
- Q20 母親の生活満足度

である。

これらの因子は、そのまま質問ごとの得点の加算ないし平均で合成変数化できるもの（Q6: Resilience）もあるが、それ以外は合成変数化の前に、因子構造の分析（exploratory factor analysis）と信頼性分析（Cronbach α ）を行って、適切な合成変数化が必要である。

因子分析と信頼性分析により、以下の合成変数を作成し、分析を行った。

- Q6: レジリエンス(CYRM-R-PMK) そのまま全て加算
 あるいは、パーソナル・レジリエンス（項目：1,2,3,7,10,12,13,14 の加算ないしは平均）と保護者・養育者レジリエンス（項目 4,5,6,8,11,15,17 の加算ないしは平均）
 Q7: QOL 心理的 QOL, 自尊感情, 友だち関係の QOL, 家族関係の QOL の 4 つの領域の加算
 Q8: 母親の養育態度
 応答的養育態度（項目 1~7 の加算）、と懲罰的養育態度（項目 8~10 の加算：逆転項目）
 Q16: 母親の子育て意識 有効な因子に分解できないため、個々の質問項目を単独で使用
 Q17: 母親が子育てで力を入れていること
 社会情動的スキル（項目: 3,5,6,7 の加算ないしは平均）とその他の多種多様なスキル(2,8,10~15 の加算ないしは平均)
 Q19: 配偶者サポート
 育児サポート（項目:1~4 の加算ないしは平均）、心理的サポート（項目 5~9 の加算ないしは平均）となった。

これらの合成変数以外にも、分析の要に合わせていくつかの合成変数を作成したが、その内容については個々の分析の項で説明する。

（１）分散分析（平均値の分析）

最初に QOL とレジリエンスの、対象者及び回答者の属性による平均値の差を求めた。まず年代（５歳、７歳）と性別による得点を比較した（ t 検定）。QOL、レジリエンスともに５歳児より７歳児の方が高い傾向が見られたが、有意差はなかった。性差を見ると、同様に QOL、レジリエンスともに、女兒の方が高い傾向が見られたが、有意差は認められなかった（表 2-1-2）。

表 2-1-2

	5 歳	7 歳	有意確率 p	男児	女兒	有意確率 p
QOL	65.85	65.85	.799	64.53	67.05	.523

参考のために 8 カ国（５歳）、6 カ国（７歳）で同じ分析を行うと、QOL、レジリエンスとも年代比較では有意差が認められなかったが、性差では女兒＞男児で有意差（QOL: $p=.044$ 、Resilience: $p=.000$ ）が認められている。対象者数（日本：５歳 246 人、７歳 114 人、8（6）カ国: 1,973（1,372）人、分析内容によって有効回答数が異なる）の差による統計的解析力の違いが反映された結果であろう。

次に、家計収入（年収）の高低による QOL、レジリエンスの平均値の比較を行った。対象家庭の家計収入の最頻値帯は 600 万円以上 800 万円未満であった。平均値で家計収入を低群と高群に分け、それぞれの QOL と Resilience の平均値を求めたところ、QOL、レジリエンスともに家計収入の高低による有意差は認められなかった（QOL: $p=.718$ 、Resilience: $p=.970$ ）。

母親の学歴による QOL、レジリエンスについて、分析した。最頻値は 4 大卒($n=171$ 人)であり、中央値は短大卒であったため、短大卒以上を高群、それ未満を低群として分析したが、家計収入同様、母親の学歴による QOL、レジリエンスの有意な群差は認められなかった（QOL: $p=.706$ 、Resilience: $p=.762$ ）。

今回の調査の重要な視点であるコロナ禍での、子どもの QOL、レジリエンスへの影響を見るために、母親のコロナ禍に対する不安（Q1-4）と、国や地域のコロナ禍への対応への満足度(Q1-3)からコロナ禍の安心度という合成変数を作成し、その高群、低群での子どもの QOL、Resilience の平均値の差を検定した。表 2-1-3 に示したように、安心度低群に比べて高群で QOL、Resilience とともに高い傾向が見られたが、統計的な有意差はなかった。

なお、安心度と満足度の間には、有意な正の相関 ($r=.190, p=.000$) が、また安心度とワクチン接種有無の間にも正の相関 ($r=.157, p=.003$) が認められている。

表 2-1-3 コロナ禍での安心度の高低と QOL, Resilience の得点

	安心度低群	安心度高群	有意確率 p
QOL	65.83	67.00	.427
Resilience	69.94	70.95	.253

ちなみに 8 カ国全体で同検定を行うと、Resilience で有意差（高群＞低群）が認められている ($p=.000$)。続いて兄弟数や出生順位が、子どもの QOL とレジリエンスに与える影響を見るために、一元配置分散分析で検討した。QOL では兄弟数による有意差が認められた（図 2-1-1）、がレジリエンスでは有意差は認められなかった（QOL $p=.005$ 、Resilience $p=.248$ ）

また出生順位による QOL、レジリエンスの得点の有意差は認められなかった（QOL: $p=.285$,Resilience $p=.994$ ）。

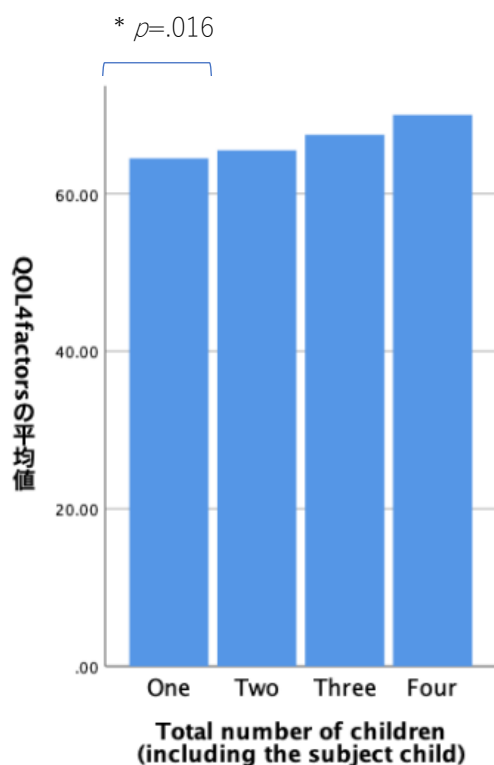


図 2-1-1 兄弟数と QOL(なお 4 人はサンプル数が少ないために 1 人との間に統計的有意差は算出されなかった。 $p=.073$)

(2) 相関

本研究の主目的の一つである、現代の子どもの QOL やレジリエンスを規定する因子の探究に先立ち、まず QOL とレジリエンスに相関する因子の探索的分析を行った。本項では Bronfenbrenner（ブロンフェンブレナー）の生態学的システムモデルに提唱されている子どもを取り巻くミクロの環境として母親の養育態度(Q8)、母親の子育て意識 (Q16)、母親が子育てで力を入れていること (Q17)、配偶者によるサポート（育児面、心理面）(Q19)、メゾ（中間的）環境として、園や学校での保育/教育における関わりやサポートの評価 (Q4) との相関を検討した。なおマクロな環境の影響については、前項で示したように相関ではなく平均値の比較を行った。また現代の子育て環境の中で重要な位置を占める ICT 関連の因子との相関は項を改めて報告する。

QOL、レジリエンスと、上記の子どもの生育環境あるいは子育て環境の因子間の相関関係を、図 2-1-2-1(1: 5 歳、2: 7 歳)に示した。有意の相関があるものは、因子間の実線で示した。線上の数字は相関係数 (r) である。なおすべての相関で有意確率 p は.000 であった。

Correlations among important variables (Japan) 5-years-old

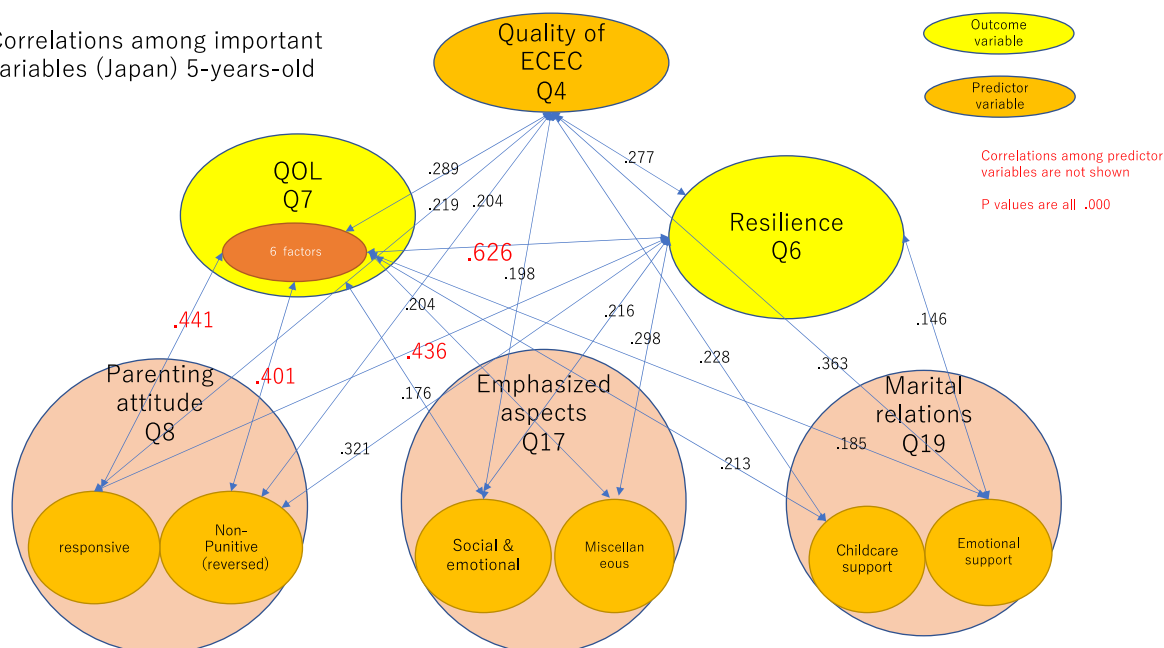


図 2-1-2-1 5 歳の因子間相関関係の図

Correlations among important variables (Japan) 7-years-old

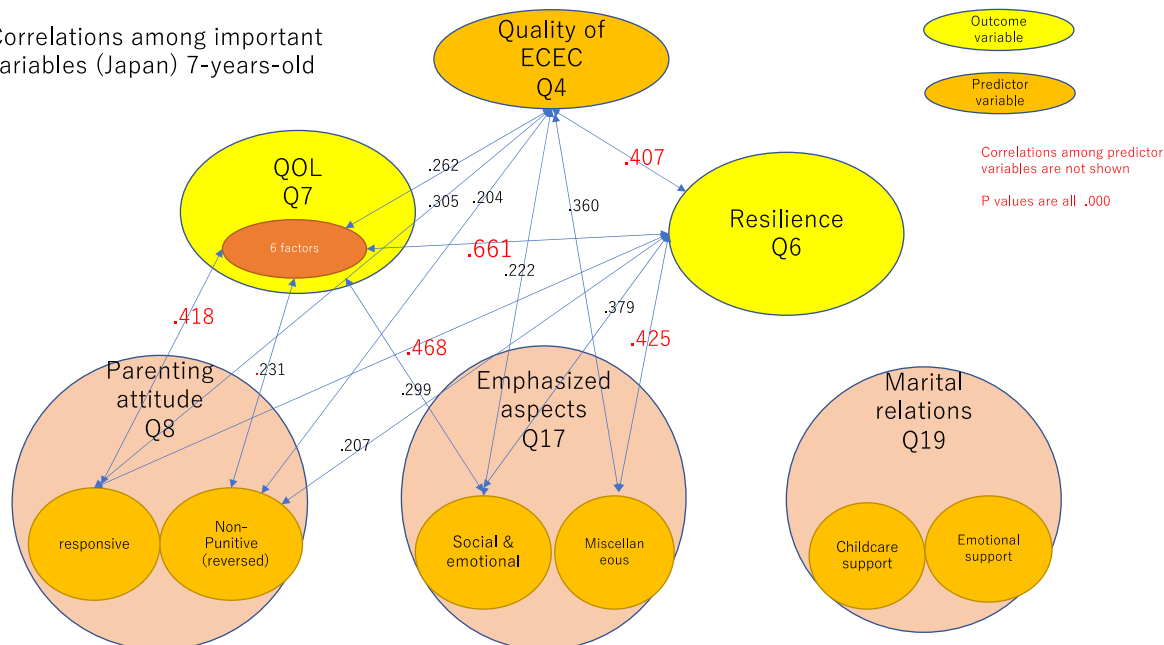


図 2-1-2-2 7 歳の因子間の相関関係の図

図 2-1-2 を見れば明らかであるが、いくつかの特徴的な所見について以下に述べる。

まず QOL とレジリエンスであるが、年齢によらず両者間には中程度～かなり強い正の相関が認められた。また QOL、Resilience (レジリエンス) と responsive parenting (応答的養育態度) の間には中程度の正の相関

が認められた。また7歳時の配偶者による育児協力以外の因子と、QOL, Resilienceの間には弱い正の相関が認められた。5歳と7歳では、上述のように、marital relations（配偶者の育児協力）における相関の有無という大きな相違以外、違いは認められなかった。

それぞれの意味づけについては、考察でまとめて述べる。

現在の生活についての母親の満足度は、本調査の主な目的からやや外れるために、別途他の因子との間の相関関係を求めた。図 2-1-3 に示すように、多くの因子との間に弱い相関関係が認められた。

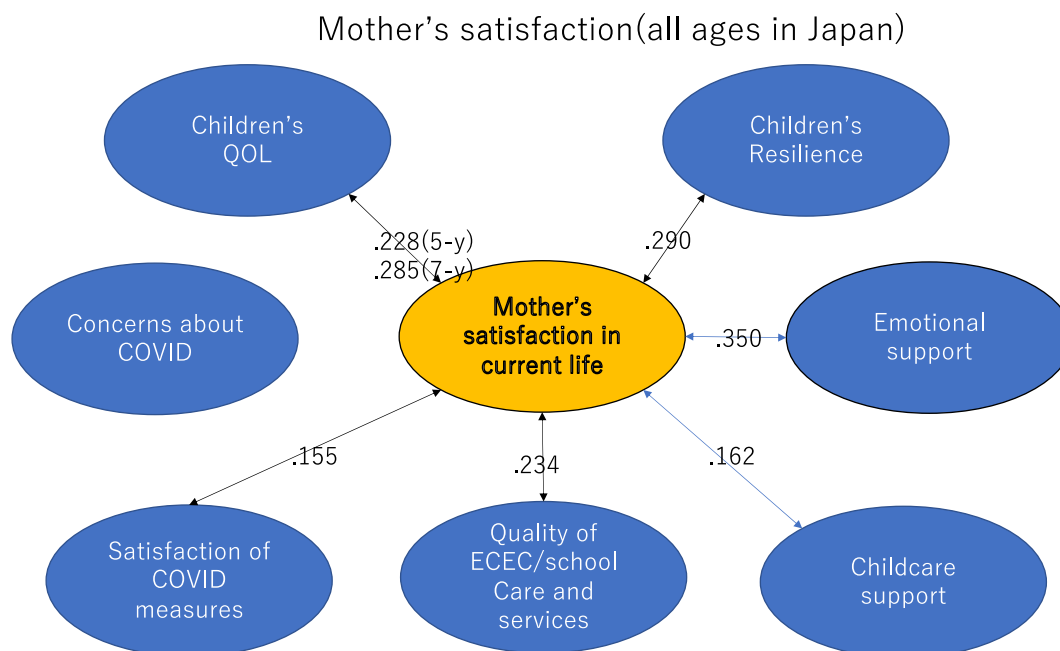


図 2-1-3 母親の生活満足度と相関のある子育て環境要因

(3) 重回帰分析

前項の相関関係をもとに、子どもの Resilience を結果変数とした、重回帰分析を行った。

5歳児と7歳児では、相関関係には大きな差は見られなかったが、ステップワイズ法で求めた重回帰分析の結果は、図 2-1-4-1, 2-1-4-2 に示すように相違が認められた。

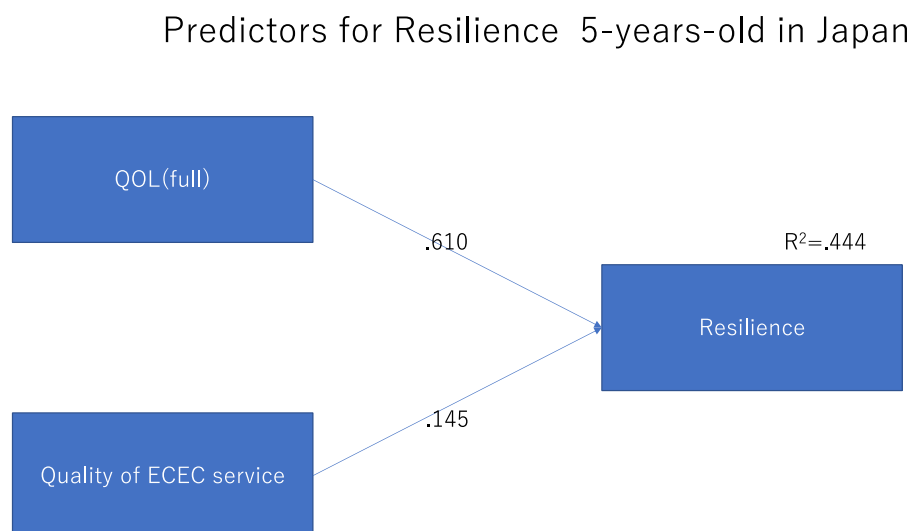


図 2-1-4-1 5歳児の Resilience を結果変数とした重回帰分析結果

Resilience を説明する要因として QOL と園での保育の質への母親の満足度が有意であることが分かる。

7 歳児では Resilience に有意な環境要因として QOL 以外にも学校での教育への母親の評価や、母親の現在の生活への満足度が関連していることがこの図から分かる。

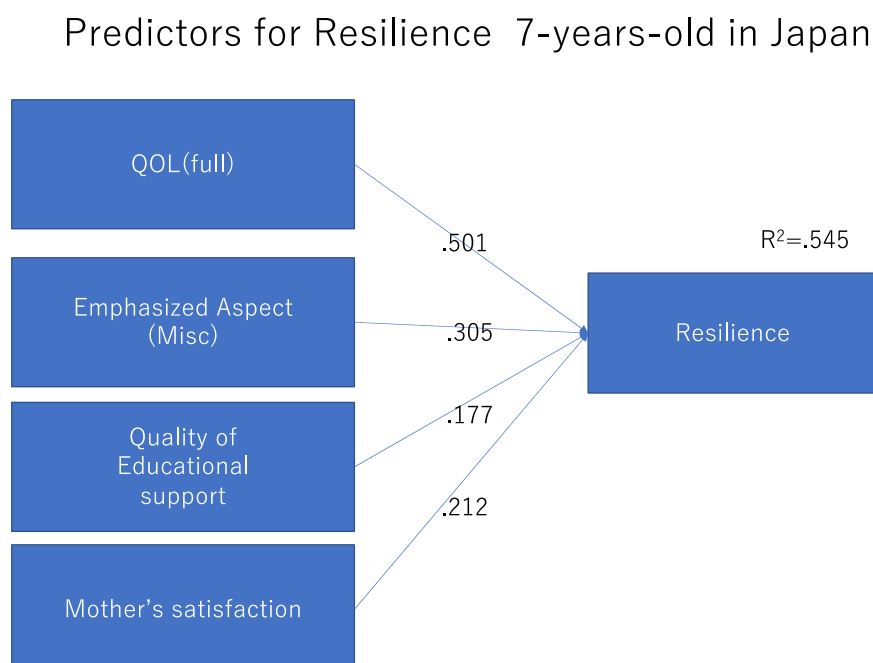


図 2-1-4-2 7 歳児の Resilience を結果変数とした重回帰分析結果

(4) 考察

本項では、コロナ禍での子どもの QOL とレジリエンスに、子どもと母親の諸属性や養育に係る諸因子、保育・教育環境がどのように関連するのかを、定量的に分析した。

調査時期が新型コロナウイルスの第 5 波が収束に向かっていった時期であり、また全国民への 2 回のワクチン接種が完了しつつある時期でもあったためか、コロナに対する母親の不安などによって、子どもの QOL やレジリエンスに統計的に有意な変化は見られなかった。しかしアジア 8 カ国全体ではコロナに対する不安と、子どものレジリエンスの間には有意な負の相関が認められている。日本での対象数が 350 人程度と少なかったために、8 カ国全体で分析したときに認められた有意な影響が検出されなかった可能性はある。

子どもの生育環境に関する因子の中で、母親の学歴と家計収入（年収）は、決して省くことのできない大きな交絡因子であることはこれまでの先行研究によって確認されている。今回も、母親の学歴と家計収入を、全体を低群と高群に分けて、群間差を見たが、有意差は見られなかった。

家庭内の環境の中で、兄弟数と出生順位も重要な交絡因子である。子どもの QOL とレジリエンスに兄弟数や出征順位が及ぼす影響を一元配置分散分析で検討したところ、出生順位では有意差が認められなかったが、QOL において兄弟数で一人っ子と三人兄弟の間で有意差（3 人 > 1 人）が認められた。この意味づけについては今後の検討を要す。

様々な属性による QOL とレジリエンスの差は認められなかったが、養育環境、保育・教育環境と QOL、レジリエンスの間の相関分析では、それらの因子との間に極めて豊かな正の相関が認められた。特に QOL と Resilience、応答的養育態度の間には、中程度から強い正の相関が認められた。また園や学校での保育、教育における関わりやサポートが、子どもの QOL、レジリエンスと中程度の有意な相関を示していたことは、子育て

における保育、教育施設の重要性を裏書きする結果であった。

相関関係で有意な相関の得られた因子から、レジリエンスを説明変数とした重回帰分析を行ったが、年齢によってやや異なるモデルが成立した。両年齢とも QOL はレジリエンスの有意の説明因子であることが証明された。5 歳児では応答的養育姿勢と ECEC の質が、7 歳児では親の子育てにおける重点項目が子どものレジリエンスの説明因子となっていた。

本項での分析は、合成変数間の相関を見る定量的分析であるが、それぞれの合成変数の中の個々の項目と QOL、レジリエンスとの関連を分析することによって、子どもの QOL、Resilience の向上に向けたより具体的な項目を明らかにすることで、子育てに資する情報が得られることが期待される。

(榊原洋一)

2-2. 日本における子どものレジリエンスと QOL

(1) 平均値の比較

本項では、子どもの QOL と Resilience に関連する要因について検討したが、5 歳児と 7 歳児の 2 群に分け、レジリエンス尺度と QOL 尺度の平均の差を確認した結果がそれぞれ表 2-2-1 と表 2-2-2 である。

表 2-2-1 より、2)[お子様は教育を受けることや園／学校でうまくやっていくことが重要であると信じている]、3)[お子様は異なる状況（学校、家、教会、寺社など）においてどのようにふるまい／行動すべきかを知ってる]、17)[お子様は、家族／養育者との季節の行事などの楽しみ方が好きである（祝日や自分たちの文化について学ぶなど）] の 3 項目で 1% 有意で 5 歳児より 7 歳児が高くなっていた。項目 2) と項目 17) については、学習的側面がより表れている項目であることから、7 歳児の方がより高く表れたと考えられる。また、項目 3) については、小学校以降の方が場面に相応しい行動が求められるようになることがその理由として挙げられるだろう。

また、表 2-2-2 より、24)[出された課題を沢山間違えた(5 歳児)/ (学校で) 悪い成績をとらないかこわがっていたようだ(7 歳児)] は 0.1% 有意で、14)[家で気持ちよく過ごしていた] は 5% 有意で 5 歳児より 7 歳児が高くなっていた。それに対して、23)[園に行くのを楽しみにしてた(5 歳児)/ 将来のことを心配していたようだ(7 years old)] は 0.1% 有意で、17)[友達と遊んだ(5 歳児)/ 友達といろいろなことをしていた(7 歳児)] は 1% 有意、2) [頭痛がしたまたは腹痛があった] と 22)[園生活を楽しんでいた(5 歳児)/ 学校の授業を楽しんでいたようだ(7 歳児)] は 5% 有意で、7 歳児より 5 歳児が高くなっていた。項目 23) についてはその他の項目に対して極めて低い結果が表れており、幼稚園・保育所等は行くことを楽しみにしている場であるが、小学校はそういう認識ではないことが浮き彫りとなっている。ただし、項目 22) については、5 歳児が有意に高い結果となっているが、授業そのものでは楽しみを感じているという結果にはつながっている。また、項目 24) については、幼稚園・保育所等とは異なり小学校では各教科での成績が出されるため、5 歳児より高くなることは当然だと考えられる。同様に、遊びを中心とする幼稚園・保育所等だからこそ、項目 17) と項目 22) が高くなったと言えるだろう。それに関連して学校での学習から家庭では気持ちよく過ごしていると保護者が捉えていると考えられる。項目 2) については、5 歳児の方が体調面について気軽に保護者に伝えることができていると捉えられる。

上記の項目についての差異は見られるものの、レジリエンス尺度と QOL 尺度から全般的に 5 歳児と 7 歳児で大きな差がないと言える。例えば、小学校高学年であれば、より学力的側面が重視されたり、児童同士の人間関係の問題も生じたりすることから、より顕著な差異が確認できるかもしれない。

表 2-2-1 5 歳児と 7 歳児のレジリエンス尺度の差異

	5歳児 (n=246)	SD	7歳児 (n=114)	SD	t 値	自由度	p 値	
[CYRM]お子様は周囲の人々と協力／共有する	3.646	0.965	3.719	0.888	-0.684	358.000	0.494	
[CYRM]お子様は教育を受けることや園／学校でうまくやっていくことが重要であると信じている	3.535	0.985	3.851	0.933	-2.877	357.000	0.004	**
[CYRM]お子様は異なる状況（学校、家、教会、寺社など）においてどのようにふるまい／行動すべきかを知ってる	3.362	0.901	3.690	0.835	-3.282	357.000	0.001	**
[CYRM]お子様がどこにいて、大抵の時間、何をしているのかを知っている親／養育者がいる	4.527	0.733	4.649	0.479	-1.890	318.192	0.060	
[CYRM]お子様のことをよく分かっている親／養育者がいる（例えば、子どもが何に喜び、怖がり、悲しんだりするのか）	4.455	0.727	4.474	0.583	-0.242	356.000	0.809	
[CYRM]お子様にはお腹が空いたら食べられるものが十分に家にある	4.694	0.614	4.781	0.436	-1.532	299.485	0.126	
[CYRM]お子様は、一緒にいると楽しい、他の子が一緒に遊びたがるような子どもである	3.972	0.928	3.912	0.868	0.575	358.000	0.565	
[CYRM]お子様は自分の気持ちについて家族／養育者に話す	4.135	0.885	4.132	0.735	0.041	262.198	0.967	
[CYRM]お子様は友達に支えられていると感じているようだ	3.494	1.003	3.675	0.926	-1.636	357.000	0.103	
[CYRM]お子様は、自分が園／学校に溶け込んでいると感じているようだ	3.955	0.959	4.044	0.733	-0.964	281.797	0.336	
[CYRM]お子様にはつらいときに気にかけてくれる家族／養育者がいる（例えば、病気だったり、何か間違ったことをしてしまったとき）	4.657	0.625	4.711	0.528	-0.791	357.000	0.430	
[CYRM]お子様にはつらいときに気にかけてくれる友達がいる（例えば、病気だったり、何か間違ったことをしてしまったとき）	3.721	0.941	3.798	0.914	-0.727	356.000	0.467	
お子様は公平に扱われている	4.209	0.727	4.158	0.748	0.614	356.000	0.539	
[CYRM]お子様には自分が成長していることや、何事も一人でできることを他者に見せる機会がある	4.171	0.898	4.123	0.832	0.489	357.000	0.625	
[CYRM]お子様は家族／養育者と一緒にいると安心する ようだ	4.709	0.553	4.781	0.456	-1.292	263.677	0.198	
[CYRM]お子様には大きくなったときに役に立つことを学ぶ機会がある（料理、仕事、人助けなど）	3.865	0.993	4.000	0.912	-1.266	238.416	0.207	
[CYRM]お子様は、家族／養育者との季節の行事などの楽しみ方が好きである（祝日や自分たちの文化について学ぶなど）	4.154	0.982	4.404	0.688	-2.773	302.705	0.006	**

** $p < 0.01$

表 2-2-2 5 歳児と 7 歳児の QOL 尺度の差異

	5歳児 (n=246)	SD	7歳児 (n=114)	SD	t値	自由度	P値	
[KINDL QOL]自分が病気だと思っているようだった	4.825	0.467	4.816	0.632	0.158	358.000	0.874	
[KINDL QOL]頭痛がしたまたは腹痛があった	4.724	0.636	4.509	0.790	2.546	183.545	0.012	**
[KINDL QOL]疲れてぐったりしていた	4.541	0.661	4.491	0.682	0.653	358.000	0.514	
[KINDL QOL]元気いっぱいと感じているようだった	4.402	0.643	4.351	0.638	0.710	358.000	0.478	
[KINDL QOL]楽しそうによく笑っていた	4.429	0.607	4.386	0.572	0.630	357.000	0.529	
[KINDL QOL]なにもしたくなさそうだった	4.447	0.690	4.474	0.755	-0.329	358.000	0.742	
[KINDL QOL]一人ぼっちだと感じているようだった	4.510	0.669	4.614	0.659	-1.376	357.000	0.170	
[KINDL QOL]何もないのにこわがったり、不安そうにしていた	4.581	0.688	4.596	0.688	-0.195	358.000	0.846	
[KINDL QOL]自信があるようだった	3.756	0.791	3.754	0.759	0.019	358.000	0.985	
[KINDL QOL]いろいろなことができると感じているようだった	3.854	0.736	3.904	0.716	-0.603	358.000	0.547	
[KINDL QOL]自分に満足しているようだった	3.980	0.694	3.930	0.648	0.645	356.000	0.520	
[KINDL QOL]いいことをいろいろ思いついていた	4.033	0.736	3.921	0.742	1.334	356.000	0.183	
[KINDL QOL]私たち親とうまくいっていた	4.296	0.563	4.377	0.522	-1.295	355.000	0.196	
[KINDL QOL]家で気持ちよく過ごしていた	4.366	0.584	4.500	0.536	-2.071	355.000	0.039	*
[KINDL QOL]親子は家でけんかをした	3.514	0.845	3.614	0.782	-1.064	355.000	0.288	
[KINDL QOL]私に監督されていると感じていた	3.702	0.917	3.711	0.784	-0.085	255.742	0.932	
[KINDL QOL]友達と遊んだ(5歳児)/友達といろいろなことをしていた(7歳児)	3.880	0.993	3.584	1.006	2.606	353.000	0.010	**
[KINDL QOL]他の子どもたちに好かれていたようだった	4.070	0.649	4.000	0.638	0.955	355.000	0.340	
[KINDL QOL]友達と仲良くしていた	4.223	0.663	4.237	0.628	-0.185	354.000	0.853	
[KINDL QOL]他の子どもに比べて自分は変わっていると感じているようだった	4.299	0.743	4.372	0.684	-0.883	352.000	0.378	
[KINDL QOL]園で言われたことをきちんとしていた(5歳児)/学校での宿題を簡単そうにやっていた(7歳児)	3.975	0.713	4.124	0.734	-1.814	352.000	0.070	
[KINDL QOL]園生活を楽しんでいた(5歳児)/学校の授業を楽しんでいたようだ(7歳児)	4.490	0.606	4.307	0.680	2.547	353.000	0.011	*
[KINDL QOL]園に行くのを楽しみにしていた(5歳児)/将来のことを心配していたようだ(7歳児)	4.349	0.697	1.447	0.730	36.053	353.000	0.000	***
[KINDL QOL]出された課題を沢山間違えた(5歳児)/(学校で)悪い成績をとらないかこわがっていたようだ(7歳児)	3.974	0.835	4.447	0.718	-5.177	342.000	0.000	***

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

2) 学業成績によるレジリエンスと QOL の差異

先に述べた通り、大きな差異はなかったとは言え、小学校における学習がレジリエンスと QOL に影響を与えている部分を確認できた。そこで、保護者が子どもの学業成績について回答する項目を抽出し、平均以下群(1 下の方～3 真ん中)と高群(4 良い、5 上の方)の 2 群に分け、レジリエンスと QOL の平均の差を確認した。その結果が、表 2-2-3 と表 2-2-4 である。

表 2-2-3 より、レジリエンス尺度については、2) [お子様は教育を受けることや園/学校でうまくやっていくことが重要であると信じている]、9) [お子様は友達に支えられていると感じているようだ]で 1%有

意で高群が高くなっていた。2)については、高群の方が学校での学習の価値づけが高くなること、学校においては授業が中心となるため友人に支えられた感覚がより強くなると考えられる。しかし、全般的に見れば、平均以下群と高群では大きな差異が見られないと言えるだろう。

一方、表 2-2-4 より、QOL 尺度については複数の項目で差異が認められた。9) [自信があるようだった]、10) [いろいろなことができると感じているようだった]、21) [園で言われたことをきちんとしていた (5 歳児)/ 学校での宿題を簡単そうにやっていた(7 歳児)]については 1%有意で、6) [なにもしたくなさそうだった]、11) [自分に満足しているようだった]、12) [いいことをいろいろ思いついていた]については 5%有意で平均以下群より高群が高くなっていた。いずれも学習に対するポジティブな行動や自己肯定感に関するものであり、学業成績が学校における QOL に影響を与ええると言えるだろう。

表 2-2-3 学業成績によるレジリエンス尺度の差異

	平均以下群 (n=70)	SD	高群 (n=41)	SD	t 値	自由度	p 値	
[CYRM]お子様は周囲の人々と協力／共有する	3.600	0.841	3.854	0.937	-1.429	76.743	0.157	
[CYRM]お子様は教育を受けることや園／学校でうまくやっていくことが重要であると信じている	3.686	0.941	4.122	0.872	-2.421	109.000	0.017	**
[CYRM]お子様は異なる状況（学校、家、教会、寺社など）においてどのようにふるまい／行動すべきかを知ってる	3.657	0.832	3.750	0.870	-0.554	108.000	0.581	
[CYRM]お子様がどこにいて、大抵の時間、何をしているのかを知っている親／養育者がいる	4.643	0.483	4.659	0.480	-0.166	109.000	0.869	
[CYRM]お子様のことをよく分かっている親／養育者がいる（例えば、子どもが何に喜び、怖がり、悲しんだりするのか）	4.400	0.575	4.610	0.586	-1.842	109.000	0.068	
[CYRM]お子様にはお腹が空いたら食べられるものが十分に家にある	4.729	0.479	4.854	0.358	-1.563	102.560	0.121	
[CYRM]お子様は、一緒にいると楽しい、他の子が一緒に遊びたがるような子どもである	3.786	0.931	4.098	0.735	-1.951	99.532	0.054	
[CYRM]お子様は自分の気持ちについて家族／養育者に話す	4.057	0.740	4.195	0.715	-0.352	109.000	0.726	
[CYRM]お子様は友達に支えられていると感じているようだ	3.643	0.948	3.707	0.901	-2.317	109.000	0.022	**
[CYRM]お子様は、自分が園／学校に溶け込んでいると感じているようだ	3.914	0.775	4.244	0.624	-0.964	281.797	0.336	
[CYRM]お子様にはつらいときに気にかけてくれる家族／養育者がいる（例えば、病気だったり、何か間違ったことをしてしまったとき）	4.700	0.521	4.707	0.559	-0.070	109.000	0.945	
[CYRM]お子様にはつらいときに気にかけてくれる友達がいる（例えば、病気だったり、何か間違ったことをしてしまったとき）	3.771	0.935	3.805	0.901	-0.184	109.000	0.854	
お子様は公平に扱われている	4.086	0.756	4.220	0.725	-0.913	109.000	0.363	
[CYRM]お子様には自分が成長していることや、何事も一人でできることを他者に見せる機会がある	4.029	0.900	4.244	0.699	-1.316	109.000	0.191	
[CYRM]お子様は家族／養育者と一緒にいると安心する ようだ	4.771	0.456	4.780	0.475	-0.099	109.000	0.921	
[CYRM]お子様には大きくなったときに役に立つことを学ぶ機会がある（料理、仕事、人助けなど）	3.914	0.959	4.146	0.823	-1.294	109.000	0.198	
[CYRM]お子様は、家族／養育者との季節の行事などの楽しみ方が好きである（祝日や自分たちの文化について学ぶなど）	4.457	0.630	4.317	0.789	1.029	109.000	0.306	

** $p<0.01$

表 2-2-4 学業成績による QOL 尺度の差異

	平均以下 (n=70)	SD	高群 (n=41)	SD	t値	自由度	p値	
[KINDL QOL] 自分が病気だと思っているようだった	4.757	0.770	4.902	0.300	-1.407	98.113	0.163	
[KINDL QOL] 頭痛がしたまたは腹痛があった	4.457	0.863	4.585	0.670	-0.873	100.496	0.385	
[KINDL QOL] 疲れてぐったりしていた	4.443	0.735	4.561	0.594	-0.875	109.000	0.384	
[KINDL QOL] 元気いっぱいと感じているようだった	4.257	0.695	4.488	0.506	-1.854	109.000	0.066	
[KINDL QOL] 楽しそうでよく笑っていた	4.300	0.574	4.512	0.553	-1.906	109.000	0.059	
[KINDL QOL] なにもしたくなさそうだった	4.357	0.762	4.659	0.728	-2.044	109.000	0.043	*
[KINDL QOL] 一人ぼっちだと感じているようだった	4.543	0.736	4.732	0.501	-1.604	106.425	0.112	
[KINDL QOL] 何もないのにこわがったり、不安そうにしていた	4.514	0.775	4.707	0.512	-1.577	107.347	0.118	
[KINDL QOL] 自信があるようだった	3.614	0.804	4.000	0.632	-2.799	99.740	0.006	**
[KINDL QOL] いろいろなことができると感じているようだった	3.757	0.770	4.146	0.573	-2.812	109.000	0.006	**
[KINDL QOL] 自分に満足しているようだった	3.829	0.659	4.098	0.625	-2.116	109.000	0.037	*
[KINDL QOL] いいことをいろいろ思いついていた	3.786	0.700	4.122	0.781	-2.340	109.000	0.021	*
[KINDL QOL] 私たち親とうまくいっていた	4.357	0.512	4.390	0.542	-0.322	109.000	0.748	
[KINDL QOL] 家で気持ちよく過ごしていた	4.457	0.557	4.537	0.505	-0.751	109.000	0.454	
[KINDL QOL] 親子は家でけんかをした	3.571	0.809	3.683	0.756	-0.718	109.000	0.474	
[KINDL QOL] 私に監督されていると感じていた	3.714	0.801	3.659	0.762	0.360	109.000	0.719	
[KINDL QOL] 友達と遊んだ(5歳児)/友達といろいろなことをしていた(7歳児)	3.529	1.059	3.575	0.874	-0.235	108.000	0.815	
[KINDL QOL] 他の子どもたちに好かれていたようだった	3.929	0.621	4.049	0.631	-0.978	109.000	0.330	
[KINDL QOL] 友達と仲良くしていた	4.186	0.644	4.268	0.593	-0.671	109.000	0.853	
[KINDL QOL] 他の子どもに比べて自分は変わっていると感じているようだった	4.329	0.737	4.425	0.594	-0.706	108.000	0.481	
[KINDL QOL] 園で言われたことをきちんとしていた(5歳児)/学校での宿題を簡単そうにやっていた(7歳児)	3.957	0.695	4.366	0.733	-2.886	80.610	0.005	**
[KINDL QOL] 園生活を楽しんでた(5歳児)/学校の授業を楽しんでいたようだ(7歳児)	4.229	0.726	4.415	0.591	-1.393	109.000	0.167	
[KINDL QOL] 園に行くのを楽しみにしていた(5歳児)/将来のことを心配していたようだ(7歳児)	1.514	0.775	1.366	0.662	1.026	109.000	0.307	
[KINDL QOL] 出された課題を沢山間違えた(5歳児)/(学校で)悪い成績をとらないかこわがっていたようだ(7歳児)	4.400	0.750	4.512	0.675	-0.789	109.000	0.432	

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

(深見俊崇)

2-3. 子どものレジリエンスと母親の子育て意識・養育態度との関連(5歳児における検討)

本調査で、子どものレジリエンスと親の養育態度・子育て意識の間に強い相関(0.436)があることが示されているが、その実態はどうか、レジリエンスの低い子どもの背景にどんな親の養育があるのか、ということの一端を探るのを目的として、調査データの解析をおこなう。統計的な解析はレポートの他の部分で行うとして、本項では、母親のどんな養育態度や子育て意識が、子どものレジリエンスに関係があるかを記述的に分析することを目的とする。

(1) 子どものレジリエンスと Q 8、Q 16、Q20s5 および Q1s4 の回答の関係の概要

1) 方法

①子どものレジリエンス(パーソナル・レジリエンス：Q6s1, 2, 3, 7, 9, 10, 12, 13, 14, 16) について：5 歳の子どもをもつ母親全回答者（246 人）について、Q6 の上記質問 10 問への回答の合計点（9～50）からレジリエンスの高い群（H 群、合計点 38 以上、62 人）と低い群（L 群、合計点 30 以下、63 人）に分けた。

②母親の育児に関して：養育態度の Q 8 の質問（10 項目）、および子育て意識の Q16 の質問（6 項目）、生活全般への満足度を問う Q20s5 を対象とした。さらに Q1s4 のコロナ感染拡大への心配の項目も含めた。Q8、Q16、Q20s5 への回答は、4 あるいは 5 が最も肯定的（ポジティブな態度の質問の場合はとてもあてはまる／とてもそう思う、ネガティブな質問の場合はまったくあてはまらない／まったくそう思わない）、1 が最も否定的である。

③子どもの L 群、H 群と母親の育児項目の関係の検討：子どものレジリエンスの L 群、H 群それぞれの、Q8（母親の養育態度）、Q16（母親の子育て意識）、Q20s5（母親の生活全般への満足度）、Q1s4（感染拡大への不安）の回答の値の合計の平均値（回答値合計/無答を除く回答人数）を求めた。平均値が高いほど、良好な態度や肯定的な考え方をしているとみることができる。L、H 両群の平均値と、全回答数（無答を除く）の平均値の差を算出した。

2) 結果

表 2-3-1 の通りである。A：全回答者の平均値、L：L 群の平均値、H：H 群の平均値、プラス値は全体平均値より上（肯定的）、マイナス値は下（否定的）を示す。

表 2-3-1 子どものレジリエンス High 群と Low 群における母親の育児態度・考え

	L-A	H-A	L と H の差
Q20s5 現在の生活全般について満足している	-0.97	0.31	1.28
Q8s1 温かく優しい声で話しかける	-0.12	0.23	0.35
Q8s2 スキンシップをとる	-0.22	0.19	0.41
Q8s3 子どもが求めることに応える	-0.13	0.16	0.29
Q8s4 何かうまくできたときに一緒に喜ぶ	-0.12	0.12	0.24
Q8s5 何かをやろうとしているときは手を出さずに最後まで見守る (危ないことは除く)	-0.20	0.12	0.32
Q8s6 やりたがることに取り組める環境を用意する	-0.19	0.21	0.40
Q8s7 興味が広がるような遊びや体験を用意する	-0.18	0.27	0.45
Q8s8 感情にまかせてしかる	-0.11	0.18	0.29
Q8s9 何か失敗するときにつくせめる	-0.11	0.22	0.33
Q8s10 言うことを聞かないときにたたく	-0.29	0.21	0.50
Q16s1 いい親であろうとして、自分に無理をしていると感じる	-0.03	0.11	0.14
Q16s2 自分の子どもは結構うまく育っていると思う	-0.36	0.23	0.59
Q16s3 子どもを育てるのは楽しく幸せなことだ	-0.19	0.22	0.41
Q16s4 いつも親と一緒にいなくても愛情をもって育てればいい	-0.08	-0.02	-0.06
Q16s5 子育てにおいて頼れるものは積極的に頼るようにしている	-0.03	0.14	0.17
Q16s6 自分の子どもが他の子どもよりも劣っていないか気になる	-0.18	0.08	0.26
Q1s4 新型コロナウイルスの今後の感染拡大の状況について、あなたは心配していますか。	-0.01	-0.11	0.10

結果は、L 群はすべての質問で全体の平均値より低く、よりネガティブな答えをしており、逆に H 群は Q16s4

(いつも親と一緒にいなくても愛情をもって育てればいい)を除くすべての質問で平均値より高い肯定的な答えをしている。質問項目のなかで、L 群と H 群の差が最も大きい(統計的には有意ではないとしても)のは、ポジティブな質問では、Q20 s5(現在の生活全般に満足している)で、続いて Q16s2 (自分の子どもは結構うまく育っていると思う)、Q8s10 (言うことを聞かないときにたたく)、さらに、Q8s7 (興味が広がるような遊びや体験を用意する)、Q8s2 (スキンシップをとる)、Q16 s3 (子どもを育てるのは楽しく幸せなことだ)である。

(2) より詳細な検討

さらにいくつかの質問について、子どものレジリエンスの L 群、H 群の回答をより細かく検討してみた。

1) 子どものレジリエンスの L 群と H 群の差が大きかった質問項目について

(a) Q20s5(現在の生活全般に満足している)：

現在の生活についてまったく満足していない人はほとんどいないものの、L 群と H 群の差は大きかった。H 群では満足している人が 8 割いるのに対し、L 群は、「あまりそう思わない」が半数である。子育ての満足度だけではなく、生活に満足し充実している親と子どものレジリエンスに関係があることが、窺われる。

回答カテゴリ	全回答人数	Low 人数	High 人数
5 (とてもそう思う)	29 人	6 人	10 人
4	120 人	24 人	39 人
3	50 人	14 人	6 人
2	34 人	15 人	5 人
1 (まったくそう思わない)	11 人	1 人	2 人

(b) Q16s2 (自分の子どもは結構うまく育っていると思う)

否定的なカテゴリ 2 の回答が L 群で多く、肯定的な 3, 4 が H 群で多いのが明らかである。L 群では、レジリエンスが低い子どもをうまく育ていないと親が思っている面と、親がうまく育っているかどうか不安なことが子どものレジリエンスに影響しているのか、の両面が考えられるが、全体としての子どもの育ちに対する親の感情と子どものレジリエンスの間に何らかの関係は推測できよう。

回答カテゴリ	全回答人数	Low 人数	High 人数
4 (とてもあてはまる)	25 人	2 人	13 人
3	162 人	30 人	40 人
2	53 人	27 人	9 人
1 (まったくあてはまらない)	6 人	4 人	0 人

(c) Q8s10 (言うことを聞かないときにたたく)：

叩くことにはほとんどの人が賛成しないものの、L 群は、あまりあてはまらない (3) がまったくあてはまらない(4)より多く、時々叩いてしまったり叩きそうになる等の、親の不安定な感情が窺われる。

回答カテゴリ	全回答人数	Low 人数	High 人数
4 (まったくあてはまらない)	141 人	23 人	45 人
3	84 人	30 人	16 人
2	18 人	8 人	1 人
1 (とてもあてはまる)	2 人	2 人	0 人

(d) Q8s7 (興味が広がるような遊びや体験を用意する)：

両群ともカテゴリ 3 (まああてはまる)が多い。しかし、とてもあてはまるが H 群の方が多く、対

照的に、あまりあてはまらないはL群が多い。H群の方が子どもの興味に応答的で環境を用意しようという志向がやや強いことが示唆される。

回答カテゴリ	全回答人数	Low 人数	High 人数
4 (とてもあてはまる)	37 人	2 人	16 人
3	161 人	45 人	44 人
2	47 人	16 人	2 人
1 (まったくあてはまらない)	0 人	0 人	0 人

(e) Q16s3 (子どもを育てるのは楽しく幸せなことだ) :

「とてもそう思う」と、子育てに幸福感を強く感じている親が両群でかなり差があり、L群は「まああてはまる」とやや大変だと思う気持ちもあり、カテゴリ2 (あまりあてはまらない) と合わせると、手放しで幸福とはいえない状況が窺われる。Q16s2 (自分の子どもは結構うまく育っていると思う) と合わせると、子どものレジリエンスと親の子育ての全般的な充足感には何らかの関係が推測される。

回答カテゴリ	全回答人数	Low 人数	High 人数
4(とてもあてはまる)	90 人	17 人	32 人
3	138 人	36 人	29 人
2	16 人	9 人	1 人
1(まったくあてはまらない)	1 人	1 人	0 人

(f) Q8s2 (スキンシップをとる) :

両群ともスキンシップが多いあるいはとろうとしていることには変わりがないが、H群の方がスキンシップを多くとっていることが分かる。H群の方が日頃から密接な関わりが頻繁であるという解釈、情緒的でより親密な相互作用をしているという解釈が可能であろう。

回答カテゴリ	全回答人数	Low 人数	High 人数
4(とてもあてはまる)	110 人	18 人	39 人
3	130 人	41 人	22 人
2	4 人	3 人	1 人
1(まったくあてはまらない)	1 人	1 人	0 人

2) ネガティブな側面についての質問

ネガティブな質問への答えが子どものレジリエンスと関係があるのかどうかを、次の2つの質問で検討した。

(a) Q8s8 (感情にまかせてしかる) :

質問の全回答者の答えが、やや否定的 (カテゴリ2のまああてはまる) が多いのが、Q8の他の質問と違っている。つまり、感情に任せて叱ってしまうのは多くの親にはあることなのだが、L群は「とてもあてはまる、まああてはまる (カテゴリ1, 2)」がH群より多く、「まったくあてはまらない、あまりあてはまらない (カテゴリ3, 4)」がH群より少ない。L群の方がそういう機会が多いのであろう。これも子どものレジリエンスとの相互的な関係がありそうである。

回答カテゴリ	全回答人数	Low 人数	High 人数
4 (まったくあてはまらない)	10 人	1 人	7 人
3	112 人	27 人	30 人
2	111 人	31 人	23 人
1 (とてもあてはまる)	10 人	4 人	2 人

(b) Q8s9 (何か失敗するときつくせめる) :

この答えも子どものレジリエンスのL群とH群で大きな差はないが、まああてはまる(カテゴリ2)はL群が多く、まったくあてはまらない(カテゴリ4)はH群が多い。ここでも、L群は子どもを責めてしまいがちという感情傾向がみられる。

回答カテゴリ	全回答人数	Low 人数	High 人数
4 (まったくあてはまらない)	44 人	8 人	15 人
3	135 人	35 人	39 人
2	61 人	17 人	8 人
1 (とてもあてはまる)	4 人	2 人	0 人

(c) 一方、次のネガティブな面の質問については、両群の違いはない。

Q16s1 (いい親であろうとして、自分に無理をしていると感じる)。

Q16s6 (自分の子どもが他の子どもよりも劣っていないか気になる)

Q1s4 (コロナ感染拡大への不安)

(3) 考察

Q20 s5(現在の生活全般について満足している)、Q8 (母親の養育態度)、Q16s2 (自分の子どもは結構うまく育っていると思う)、Q16s3 (子どもを育てるのは楽しく幸せなことだ) の3つの質問について、子どものレジリエンスとの関連が示唆されたことはいずれも、実際の子どもへの接し方というよりも、母親自身の生活への姿勢や気持ちの安定が影響しているということが推測される。本調査は子どものレジリエンスについての親の判断を基にしているので、子どものレジリエンスが低いことは、子ども自身のレジリエンスなのか、それとも親が子どもの否定的な面を見がちだったり悲観的に考える傾向なのか、という問いも生じる。つまり、親の生活へのストレスや不安定な気持ちが子ども自身に直接影響するだけでなく、子どもに対する見方にも影響する可能性も示唆している。子どもの子育て以外の母親の生活、たとえば家庭の経済生活、配偶者や他の家族との生活、本項では対象にしなかった母親の職業生活なども母親の充実感に影響し、それが子どものレジリエンスと関連することもあり得るかもしれない。また、親が不安定な状態に陥っているときに感情的に叱ったり叩いたりするといったことが、子どものレジリエンスにマイナスに響くことも示唆された。コロナ下で生活上の混乱や不安定な状態が生じたり、在宅勤務などで親子ともにストレスが高まることは子どものレジリエンスに影響すると考えられる。本調査の参加者には非常に不安定な親やレジリエンスの非常に低い子どもはいなかったし、本調査の結果だけで結論は軽々には下せないが、現下の困難と先の見えない不安定な社会状況のなかで、強いストレスを抱えた親子への支援が大切であることは間違いないことであろう。

(星 三和子)

2-4. 親のデジタルメディア観に関する検討

コロナ禍の影響で、子どもたちの生活時間が変わった。Q14 では、以下についての時間の変化を質問している。子どもたちの屋外での遊ぶ時間が減るいっぽうで、家庭でのメディアの合計視聴・使用時間が増加していることがわかった (表 2-4-1)

- 1) 屋外で自由に遊ぶ時間 (園や学校、習い事を除く)
- 2) 屋内で自由に遊ぶ時間 (園や学校、習い事を除く)
- 3) 家庭でのメディアの合計視聴・使用時間 (テレビ・DVD、タブレット、スマホ等)

表 2-4-1 コロナ禍の影響による時間の変化

			5歳児		7歳児	
			246		114	
			n	%	n	%
q14s1	【時間の変化】屋外 で自由に遊ぶ時間 (園や学校、習い事 を除く)	1 増えた	20	8.1	9	7.9
		2 変わらない	112	45.5	49	43.0
		3 減った	114	46.3	56	49.1
		無回答	0	0.0	0	0.0
q14s2	【時間の変化】屋内 で自由に遊ぶ時間 (園や学校、習い事 を除く)	1 増えた	125	50.8	66	57.9
		2 変わらない	111	45.1	39	34.2
		3 減った	10	4.1	8	7.0
		無回答	0	0.0	1	0.9
q14s3	【時間の変化】家庭 でのメディアの合計 視聴・使用時間(テ レビ・DVD、タブ	1 増えた	136	55.3	68	59.6
		2 変わらない	109	44.3	45	39.5
		3 減った	1	0.4	1	0.9
		無回答	0	0.0	0	0.0

(1) 親のデジタルメディア観の因子による対象者の分類

本項では、「Q10 子どものデジタルメディア活用時の保護者のかかわり」を親のデジタルメディア観(Digital media viewing)とする。親のデジタルメディア観(クラスター)を属性(独立変数)として、各設問の得点(従属変数)を比較する。設問は、(Q9)子どものデジタルメディアの活用実態、(Q6)子どものレジリエンス、(Q7)子どものQOL、(Q8)母親の養育態度、(Q16)母親の子育て意識、(Q17)母親が子育てで力を入れていること、の各質問項目とする。

まず、Q10 デジタルメディア観(Digital media viewing)の質問項目の因子分析を行った結果、5歳児と7歳児のデータそれぞれに2つ因子が抽出された(表 2-4-2、表 2-4-3)。因子1を「子どものICT使用時の働きかけ」、因子2を「子どものICT使用時の積極的な支援」とする。

表 2-4-2: 親のデジタルメディア観の因子(5歳児)

		F1	F2	共通性
<i>rq10s4</i>	子どもが使用・視聴している内容に即して話しかける	.695	.068	.549
<i>rq10s3</i>	子どもが使用・視聴している様子を気にかける	.550	.085	.370
<i>rq10s2</i>	子どもが使用・視聴するものを親が選ぶ	.530	-.200	.183
<i>rq10s5</i>	子どもと一緒に使用・視聴する	.524	.108	.360
<i>rq10s8</i>	子どもが難しいことに取り組めるよう支援する	-.146	.716	.398
<i>rq10s7</i>	知らないことが出てきた時に一緒に調べる	.058	.714	.567
	因子寄与	1.798	1.636	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>
因子1	子どものICT使用時の働きかけ	2.86	0.53	.654
因子2	子どものICT使用時の積極的な支援	2.81	0.64	.630

表 2-4-3: 親のデジタルメディア観の因子 (7 歳児)

		F1	F2	共通性
<i>rq10s5</i>	子どもと一緒に使用・視聴する	.859	-.091	.751
<i>rq10s4</i>	子どもが使用・視聴している内容に即して話しかける	.760	-.065	.480
<i>rq10s2</i>	子どもが使用・視聴するものを親が選ぶ	.540	.167	.439
<i>rq10s3</i>	子どもが使用・視聴している様子を気にかける	.493	.179	.321
<i>rq10s8</i>	子どもが難しいことに取り組めるよう支援する	-.038	.703	.500
<i>rq10s7</i>	知らないことが出てきた時に一緒に調べる	.045	.664	.443
	因子寄与	2.180	1.561	
		<i>M</i>	<i>SD</i>	α
因子1	子どものICT使用時の働きかけ	2.99	0.61	.772
因子2	子どものICT使用時の積極的な支援	3.16	0.64	.640

次に、クラスター分析を使用して、2つの因子の特徴により対象者をタイプ分けした。分析の結果、3つのクラスター（群）が導出された（図 2-4-1、図 2-4-2）。

- ・ 因子1 子どもの ICT 使用時の働きかけ : クラスター1>2>3
 - ・ 因子2 子どもの ICT 使用時の積極的な支援 : クラスター1>2>3
- （標準化得点）

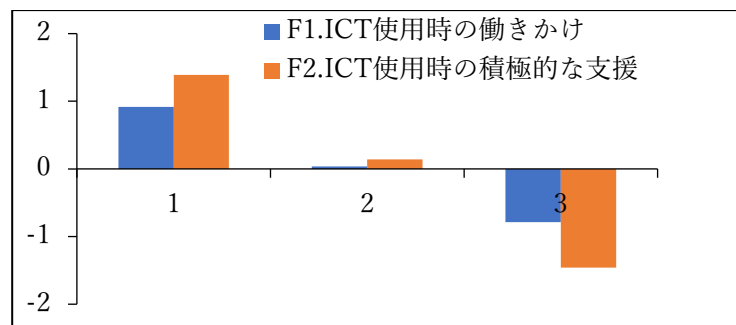


図 2-4-1: クラスター分析による対象者のタイプ分け (5 歳児)

（標準化得点）

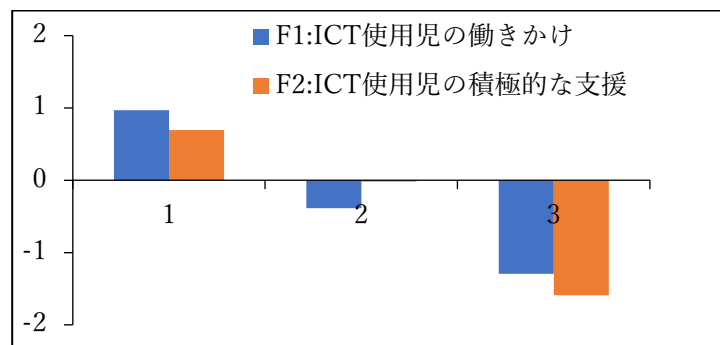


図 2-4-2: クラスター分析による対象者のタイプ分け (7 歳児)

なお、これらのクラスターの人数の内訳は以下の通りである（表 2-4-3、表 2-4-4）。

表 2-4-3: 親のデジタルメディア観の因子 (5 歳児)

クラスター	N	クラスター名	特徴
1	36	働きかけ意識高群	子どもの ICT 使用時の働きかけに対する意識が高い
2	155	平均群	子どもの ICT 使用時の働きかけに対する意識が中位
3	49	働きかけ意識低い群	子どもの ICT 使用時の働きかけに対する意識が低い

表 2-4-4: 親のデジタルメディア観の因子 (7 歳児)

クラスター	N	クラスター名	特徴
1	45	働きかけ意識高群	子どもの ICT 使用時の働きかけに対する意識が高い
2	49	平均群	子どもの ICT 使用時の働きかけに対する意識が中位
3	19	働きかけ意識低い群	子どもの ICT 使用時の働きかけに対する意識が低い

(2) デジタルメディア観によるグループごとによる各質問項目の結果

子どもがデジタルメディアを使用・視聴する際の親の関わり方に対する考え方の意識についてクラスター分析を行った結果、高い群・平均群・低い群の3つの群が導出された。ここでは、(Q9) 子どものデジタルメディアの活用実態、(Q6) 子どものレジリエンス、(Q7) 子どもの QOL、(Q8) 母親の養育態度、(Q16) 母親の子育て意識、(Q17) 母親が子育てで力を入れていること、の各質問項目において、3つの群による回答の平均値の分散分析を行う。

まず、(Q9) 子どものデジタルメディアの活用実態の回答について、群ごとの平均値に有意な差があった質問項目を示す(表 2-4-5、表 2-4-6)。5 歳児は 9 項目、7 歳児は 10 項目であった。どちらの年齢も関わりへの意識が高い群は、「3 文字や数遊び」、「4 本や絵本を読む」、「5 外国語学習を楽しむ」、「13 園や学校の宿題をする」、「14 園や学校の宿題以外の勉強をする」等、学習に関する項目が高かった。さらに、「8 身体を動かせるようなプログラムを楽しむ」や「11 ニュースを見る」という学習以外の項目も高かった。5 歳児では、「12 情報を検索する(勉強を含む)」という知識構築に繋がる項目も高い。7 歳児では、「1 動画を視聴する」、「9 ゲームをする」という項目は、関わりへの意識が低い群の方が、平均値が高かったということは着目すべきである。

表 2-4-5: Q9 クラスターごとの平均値(標準偏差)(5 歳児)

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター								F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群	全体						
3 文字や数遊びをする	3.94 (0.21)	3.60 (0.10)	2.84 (0.18)	3.46 (0.10)	9.02	**	12>3			
4 本・絵本を読む(電子書籍含む)	3.94 (0.25)	3.47 (0.13)	3.00 (0.22)	3.47 (0.12)	3.95	*	1>3			
5 外国語学習を楽しむ	3.18 (0.22)	2.54 (0.11)	2.20 (0.19)	2.64 (0.10)	5.81	**	1>2 1>3			
8 身体を動かせるようなプログラムを楽しむ	3.94 (0.22)	3.22 (0.11)	2.76 (0.19)	3.30 (0.10)	8.41	**	1>2 2>3			
10 通話やメール、SNSをする	1.88 (0.16)	1.70 (0.08)	1.33 (0.14)	1.64 (0.08)	3.76	*	1>3			
11 ニュースを見る	2.09 (0.19)	2.01 (0.10)	1.36 (0.17)	1.82 (0.09)	6.42	**	12>3			
12 情報を検索する(勉強を含む)	2.00 (0.18)	1.80 (0.09)	1.33 (0.15)	1.71 (0.08)	4.84	*	12>3			
13 園や学校の宿題をする	1.97 (0.19)	1.70 (0.09)	1.22 (0.17)	1.63 (0.09)	4.86	*	12>3			
14 園や学校の宿題以外の勉強をする	3.41 (0.23)	2.65 (0.11)	1.96 (0.20)	2.67 (0.11)	11.53	**	1>2>3			

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

表 2-4-6: Q9 クラスターごとの平均値（標準偏差）（7 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群						
1 動画を視聴する	3.09 (0.17)	4.06 (0.16)	4.16 (0.26)	3.77 (0.12)	10.19	**	23>1		
3 文字や数遊びをする	3.58 (0.20)	3.47 (0.19)	2.68 (0.31)	3.24 (0.14)	3.17	*	1>3		
4 本・絵本を読む(電子書籍含む)	3.42 (0.24)	3.78 (0.22)	2.26 (0.36)	3.15 (0.16)	6.56	*	1>3 2>3		
5 外国語学習を楽しむ	3.26 (0.19)	3.00 (0.18)	2.00 (0.29)	2.75 (0.13)	6.51	**	12>3		
6 お絵描きをする(塗り絵を含む)	3.47 (0.22)	3.35 (0.21)	2.42 (0.34)	3.08 (0.15)	3.63	*	12>3		
8 身体を動かせるようなプログラムを楽しむ	3.28 (0.21)	3.31 (0.19)	2.16 (0.31)	2.91 (0.14)	5.50	**	12>3		
9 ゲームをする	2.72 (0.21)	3.69 (0.19)	3.58 (0.31)	3.33 (0.14)	6.48	*	3>1 2>1		
11 ニュースを見る	2.65 (0.19)	2.27 (0.17)	1.58 (0.28)	2.17 (0.13)	5.08	**	1>3		
13 園や学校の宿題をする	3.93 (0.24)	4.04 (0.22)	2.84 (0.36)	3.60 (0.16)	4.28	*	12>3		
14 園や学校の宿題以外の勉強をする	3.67 (0.21)	3.41 (0.19)	2.58 (0.31)	3.22 (0.14)	4.35	**	1>3		

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

次に、(Q6) 子どものレジリエンスの回答について、群ごとの平均値の差が有意であったものを示す（表 2-4-7、表 2-4-8）。5 歳児は 10 項目、7 歳児は 5 項目であった。どちらの年齢も関わりへの意識が高い群は、「3 お子様は異なる状況（学校、家、教会、寺社など）においてどのようにふるまい／行動すべきかを知っている」、「14 お子様には自分が成長していることや、何事も一人でできることを他者に見せる機会がある」等の個人特性に関する回答の平均値が高かった。また、「16 お子様には大きくなったときに役に立つことを学ぶ機会がある（料理、仕事、人助けなど）」、「17 お子様は、家族／養育者との季節の行事などの楽しみ方が好きである（祝日や自分たちの文化について学ぶなど）」といった養育者に関する回答の平均値が高かった。その他、5 歳児は、「1 お子様は周囲の人々と協力／共有する」、「13 お子様は公平に扱われている」等の個人特性に関するものへの回答の平均値が高かった。さらに 5 歳児は、「5 お子様のことをよく分かっている親／養育者がいる（例えば、子どもが何に喜び、怖がり、悲しんだりするのか）」、「8 お子様は自分の気持ちについて家族／養育者に話す」といった養育者に関する回答の平均値が有意に高かった。

表 2-4-7: Q6 クラスターごとの平均値（標準偏差）（5 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F			
	1.意識群		2.平均群		3.意識低群						
1 お子様は周囲の人々と協力／共有する	4.11	(0.18)	3.69	(0.08)	3.41	(0.13)	3.73	(0.08)	5.04	**	1>3
3 お子様は異なる状況(学校、家、教会、寺社など)においてどのようにふるまい／行動すべきかを知ってる	3.89	(0.17)	3.36	(0.08)	3.24	(0.13)	3.50	(0.08)	5.00	**	1>23
5 お子様のことをよく分かっている親／養育者がいる(例えば、子どもが何に喜び、怖がり、悲しんだりするのか)	4.74	(0.14)	4.44	(0.06)	4.29	(0.11)	4.49	(0.06)	3.33	*	1>3
8 お子様は自分の気持ちについて家族／養育者に話す	4.59	(0.17)	4.16	(0.07)	3.90	(0.12)	4.22	(0.07)	5.61	* **	1>2 1>3
11 お子様にはつらいときに気にかけてくれる家族/養育者がいる(例えば、病気だったり、何か間違っ たことをしてしまったとき)	4.96	(0.11)	4.63	(0.05)	4.69	(0.08)	4.76	(0.05)	3.65	*	1>2
12 お子様にはつらいときに気にかけてくれる友達がいる(例えば、病気だったり、何か間違 ったことをしてしまったとき)	4.37	(0.17)	3.64	(0.07)	3.69	(0.13)	3.90	(0.07)	7.75	**	1>23
13 お子様は公平に扱われている	4.56	(0.13)	4.15	(0.06)	4.24	(0.10)	4.32	(0.06)	4.49	**	1>2
14 お子様には自分が成長していることや、何事も一人でできることを他者に見せる機会があ る	4.66	(0.15)	4.11	(0.07)	4.14	(0.12)	4.30	(0.07)	5.40	** *	1>2 1>3
16 お子様には大きくなったときに役に立つことを学ぶ機会がある(料理、仕事、人助けなど)	4.41	(0.17)	3.90	(0.08)	3.55	(0.14)	3.95	(0.08)	7.73	* **	1>2>3 1>3
17 お子様は、家族／養育者との季節の行事などの楽しみ方が好きである(祝日や自分たち の文化について学ぶなど)	4.53	(0.17)	4.22	(0.08)	3.86	(0.14)	4.20	(0.08)	5.19	** *	1>3 2>3

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

表 2-4-8: Q6 クラスターごとの平均値（標準偏差）（7 歳児）

項目		Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F			
		1.意識高群		2.平均群		3. 意識低群						
3	お子様は異なる状況(学校、家、教会、寺社など)においてどのようにふるまい／行動すべきかを知ってる	4.02	(0.12)	3.57	(0.11)	3.22	(0.19)	3.61	(0.08)	7.68	*	1>2
											**	1>3
11	お子様にはつらいときに気にかけてくれる家族/養育者がいる(例えば、病気だったり、何か間違っただことをしてしまったとき)	4.78	(0.08)	4.78	(0.07)	4.33	(0.12)	4.63	(0.05)	5.73	**	12>3
14	お子様には自分が成長していることや、何事も一人でできることを他者に見せる機会がある	4.29	(0.12)	4.24	(0.01)	3.44	(0.18)	3.99	(0.08)	8.36	**	12>3
16	お子様には大きくなったときに役に立つことを学ぶ機会がある(料理、仕事、人助けなど)	4.16	(0.13)	4.04	(0.13)	3.50	(0.21)	3.90	(0.09)	3.50	*	1>3
17	お子様は、家族／養育者との季節の行事などの楽しみ方が好きである(祝日や自分たちの文化について学ぶなど)	4.51	(0.10)	4.48	(0.10)	3.94	(0.16)	4.31	(0.07)	5.10	**	1>3
											*	2>3

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

次に、(Q7) 子どもの QOL の回答について、群ごとの平均値の差が有意であったものを示す（表 2-4-9、表 2-4-10）。5 歳児は 1 項目、7 歳児は 4 項目であった。どちらの年齢にも共通した項目はなかった。5 歳児は、「12 いいことをいろいろ思いついていた」が、意識の高い群がその他群より高かった。7 歳児では、「10 いろいろなことができると感じている」、「14 家で気持ちよく過ごしていた」という項目のほか、学校にまつわる 2 項目「21 学校での宿題を簡単そうにやっていた」、「22 学校の授業を楽しんでいたようだ」で、意識の高い群が他群よりも高かった。

表 2-4-9: Q7 クラスターごとの平均値（標準偏差）（5 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群						
12 いいことをいろいろ思いついていた	4.41 (0.14)	4.02 (0.06)	3.84 (0.10)	4.09 (0.06)	5.60	*	1>2	**	1>3

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

表 2-4-10: Q7 クラスターごとの平均値（標準偏差）（7 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群						
10 いろいろなことができると感じているようだった	3.93 (0.11)	4.00 (0.1)	3.53 (0.16)	3.82 (0.07)	3.29	*	2>3		
14 家で気持ちよく過ごしていた	4.62 (0.08)	4.49 (0.07)	4.21 (0.12)	4.44 (0.05)	3.99	*	1>3		
21 学校での宿題を簡単そうにやっていた	4.26 (0.11)	4.18 (0.1)	3.58 (0.16)	4.01 (0.07)	6.77	**	12>3		
22 学校の授業を楽しんでいたようだ	4.45 (0.1)	4.27 (0.09)	3.95 (0.15)	4.22 (0.07)	3.83	*	1>3		

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

(Q8) 母親の養育態度の回答について、群ごとの平均値の差が有意であったものを示す（表 2-4-11、表 2-4-12）。5 歳児は 5 項目、7 歳児は 3 項目であった。どちらの年齢も関わりへの意識が高い群は、「6 やりたがることに取り組める環境を用意する」、「7 興味が広がるような遊びや体験を用意する」であった。5 歳児は、「2 スキンシップをとる」、「4 何かうまくできたときに一緒に喜ぶ」が、意識の高い群がその他群より高かった。また、「10 言うことを聞かないときにたたく」という項目に、5 歳児の意識の高い群が否定的な回答をしており、意識の高い群と低い群の平均値の差が有意であった。7 歳児では、「3 子どもが求めることに答える」という項目で、意識の高い群が他群よりも高かった。

表 2-4-11: Q8 クラスターごとの平均値（標準偏差）（5 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群						
2 スキンシップをとる	3.74 (0.09)	3.35 (0.04)	3.41 (0.08)	3.50 (0.04)	7.75	**	1>2	*	1>3
4 何かうまくできたときに一緒に喜ぶ	3.83 (0.08)	3.63 (0.04)	3.55 (0.07)	3.67 (0.04)	3.41	*	1>3		
6 やりたがることに取り組める環境を用意する	3.34 (0.08)	3.07 (0.04)	2.92 (0.07)	3.11 (0.04)	8.27	**	1>23		
7 興味が広がるような遊びや体験を用意する	3.29 (0.10)	2.93 (0.05)	2.78 (0.08)	3.00 (0.04)	8.66	**	1>23		
10 言うことを聞かないときにたたく (1 とてもあてはまる 2 まああてはまる 3 あまりあてはまらない 4 まったくあてはまらない)	3.71 (0.11)	3.49 (0.05)	3.35 (0.09)	3.52 (0.05)	3.27	*	1>3		

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

表 2-4-12: Q8 クラスターごとの平均値（標準偏差）（7 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群						
3 子どもが求めることに答える	3.30 (0.07)	3.08 (0.06)	3.00 (0.1)	3.126 (0.05)	4.15	*	1>23		
6 やりたがることに取り組める環境を用意する	3.57 (0.08)	3.27 (0.07)	2.79 (0.12)	3.208 (0.05)	15.10	**	1>2>3		
7 興味が広がるような遊びや体験を用意する	3.30 (0.09)	3.29 (0.08)	2.74 (0.13)	3.106 (0.06)	7.56	**	1>23		

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

(Q16) 母親の子育て意識の回答について、群ごとの平均値の差が有意であったものを示す（表 2-4-13）。5 歳児が 1 項目で、7 歳児に差はみられなかった。5 歳児の意識が高い群は、「3 子どもを育てるのは楽しく幸せなことだ」という項目への回答が高かった。

表 2-4-13: Q16 クラスターごとの平均値（標準偏差）（5 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群						
3 子どもを育てるのは楽しく幸せなことだ	3.53 (0.10)	3.26 (0.05)	3.18 (0.09)				3.32 (0.05)	3.68 *	1>23

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

（Q17）母親が子育てで力を入れていることの回答について、群ごとの平均値の差が有意であったものを示す（表 2-4-14、表 2-4-15）。5 歳児は 10 項目、7 歳児は 8 項目であった。どちらの年齢も関わりへの意識が高い群は、「4 他者への思いやりをもつこと」、「8 親子でたくさんふれあうこと」、「9 興味や関心を広げること」、「10 親子で一緒に過ごすこと」、「11 自然とたくさんふれあうこと」、「14 芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」、「15 外国語を学ぶこと」であった。5 歳児は、「5 自分の気持ちや考えを人に伝えること」、「7 数や文字を学ぶこと」、「13 伝統や文化を大切にすること」の項目について、意識の高い群がその他群より高かった。7 歳児では、「3 基本的な生活習慣を身につけること」の項目で、意識の高い群が他群より高かった。

表 2-4-14: Q17 クラスターごとの平均値（標準偏差）（5 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群						
4 他者への思いやりをもつこと	3.64 (0.08)	3.50 (0.04)	3.27 (0.07)				3.47 (0.04)	6.28 **	1>3 * 2>3
5 自分の気持ちや考えを人に伝えること	3.44 (0.10)	3.29 (0.05)	3.04 (0.09)				3.26 (0.05)	5.17 **	1>3 * 2>3
7 数や文字を学ぶこと	3.00 (0.11)	2.74 (0.06)	2.39 (0.10)				2.71 (0.05)	8.98 *	1>2 ** 12>3
8 親子でたくさんふれあうこと	3.47 (0.10)	3.19 (0.05)	2.94 (0.08)				3.20 (0.04)	8.99 *	1>2 ** 12>3
9 興味や関心を広げること	3.58 (0.10)	3.14 (0.05)	2.90 (0.09)				3.21 (0.05)	13.75 **	1>23 * 2>3
10 親子で一緒に過ごすこと	3.39 (0.09)	3.14 (0.04)	2.88 (0.07)				3.14 (0.04)	10.06 *	1>2 ** 12>3
11 自然とたくさんふれあうこと	3.06 (0.12)	2.99 (0.06)	2.59 (0.10)				2.88 (0.06)	6.39 **	12>3
13 伝統や文化を大切にすること	2.67 (0.11)	2.42 (0.05)	2.08 (0.09)				2.39 (0.05)	8.57 *	1>2 ** 12>3
14 芸術的な才能を伸ばすこと(音楽や絵画など)	2.69 (0.12)	2.43 (0.06)	2.22 (0.10)				2.45 (0.06)	4.40 *	1>3
15 外国語を学ぶこと	2.44 (0.14)	2.17 (0.07)	1.82 (0.12)				2.14 (0.07)	6.02 **	1>3 * 2>3

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

表 2-4-15: Q17 クラスターごとの平均値（標準偏差）（7 歳児）

項目	Q10 親のデジタルメディア観 クラスター						全体	F	
	1.意識高群	2.平均群	3.意識低群						
3 基本的な生活習慣を身につけること	3.67 (0.07)	3.51 (0.07)	3.33 (0.12)				3.50 (0.05)	3.18 *	1>3
4 他者への思いやりをもつこと	3.76 (0.07)	3.63 (0.07)	3.28 (0.11)				3.56 (0.05)	6.87 **	1>3 * 2>3
8 親子でたくさんふれあうこと	3.60 (0.08)	3.41 (0.08)	2.83 (0.13)				3.28 (0.06)	13.26 **	12>3
9 興味や関心を広げること	3.53 (0.09)	3.49 (0.09)	3.00 (0.15)				3.34 (0.07)	5.00 **	1>3 * 2>3
10 親子で一緒に過ごすこと	3.39 (0.09)	3.14 (0.04)	2.88 (0.07)				3.14 (0.04)	10.06 *	1>2 ** 12>3
11 自然とたくさんふれあうこと	3.62 (0.07)	3.33 (0.07)	2.89 (0.12)				3.28 (0.05)	14.30 **	1>23 * 2>3
14 芸術的な才能を伸ばすこと(音楽や絵画など)	2.98 (0.11)	2.80 (0.11)	2.22 (0.18)				2.67 (0.08)	6.47 *	1>3 * 2>3
15 外国語を学ぶこと	2.78 (0.14)	2.61 (0.14)	1.94 (0.22)				2.44 (0.1)	5.03 **	1>3 * 2>3

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

（3）考察

本項では、親のデジタルメディア観（Digital media viewing）を因子 1「子どもの ICT 使用時の働きかけ」、因子 2「子どもの ICT 使用時の積極的な支援」という 2 つの因子として抽出し、子どもがデジタルメディアを使用・視聴する際の親の関わりに対する意識に対する 3 つの群に分けた。意識が高い群、平均群、低い群である。この意識の差が、子どものデジタルメディアの使用、子どものレジリエンス、子どもの QOL、母親の養育態度、母親の子育て意識、母親が子育てで力を入れていることにどのように関係するのかについて、3

つの群による差の分析を行った。

子どもの ICT 使用時における親の働きかけに対する意識の高低によって、子どものデジタルメディアの使用に差があった。意識の高い群は、デジタルメディアの使用時に、学習を目的とした使用をしていただけて、身体を動かせるプログラムを楽しむ、ニュースを見るといった受動的な使い方に留まらない、積極的な活動や情報収集をしていた。特に 7 歳児では、動画の視聴やゲームをするなどといった子どもの長時間使用に対して懸念が大きい項目において、意識の低い群が有意に高い回答となっていた。これに対し、意識の高い親は、デジタルメディアを用いて子どもの豊かな経験を促す傾向にあると考える。

さらに、子どもの ICT 使用時における親の働きかけに対する意識の高低は、養育態度や子育て意識、子育てで力を入れていることにも関係していた。

子どもの ICT 使用時における親の働きかけに対する意識が高い親は、子どもがやりたがることに取り組める環境を用意したり、興味が広がるような遊びや体験を用意することに対する配慮も高い傾向がみられた。特に 5 歳児ではスキンシップをとったり、一緒に喜ぶといった親との関わりを大切にしている。5 歳児のみであったが、子どもを育てるのは楽しく幸せなことだという育児観も高かった。

さらに、子育てで力を入れていることについても、親子でたくさん触れ合ったり、一緒に過ごすことなどの親子の関係性だけでなく、興味や関心を広げたり、自然とたくさんふれあうことにも配慮しており、子どもの経験を豊かにすることへの意識も高かった。

これらの結果から、以下のようなことが推察される。まず、子どもの ICT の使用方法や活動には差があり、使用方法の差には、親のデジタルメディア観が大きく関係しているということである。さらには親のデジタルメディア観は、デジタルメディアに特有のものではなく、そもそもの親の養育態度、子育て意識、子育てで力を入れていることと関連していることを示した。子どもとの時間を大切にし、子どもに積極的に働きかけ、豊かな環境を与えようとする親は、通常の子育てに関わる環境だけでなく、デジタルメディアにも通じるところがあるということである。それらの意識が、子どものデジタルメディアの使用法や活動に現れるだけでなく、最終的には、子どものレジリエンスや QOL へも影響していくものと考ええる。

今後は、子どもの ICT の活用方法に対する親の知識や働きかけに対する考え方を含めた親のリテラシーを身につける方法について、検討していくことが課題である考える。

(佐藤朝美)

3. まとめ

本レポートでは、子どものレジリエンスと QOL をアウトカム変数とし、子ども、母親（回答者）の基本属性と、養育態度や子育てで力を入れていること、あるいは子育てへの配偶者の支援、保育園、学校の保育教育サービス・サポートとの関連の定量的、定性的な分析を行った。また、子どもの ICT 使用に関する保護者の姿勢と子どものレジリエンス、QOL、および保護者の養育態度や子育て意識の相関について分析を行った。また 7 歳児では、子どもの学業成績とレジリエンス、QOL の関連も分析した。

結果として得られた多数の因子間の関連の全体像をみるまでの作業には至っていないが、子どものレジリエンスと QOL に関連する因子が、Bronfenbrenner（ブロンフェンブレナー）のエコロジカルモデルの、micro, meso, macro のすべてのレベルに存在することが明らかになった。また一部の独立変数しか投入していないが、重回帰分析において、子どものレジリエンスを説明する有意な因子を確認することもできた。特に年齢によらず、子どもの QOL がレジリエンスの重要な説明因子であることが確認された。さらに多くの変数を投入したモデルをこれから検討し、より完全なモデルを作成する手がかりが得られたと考える。

子どもの生育環境の中で重要な友達や遊びが、子どもの QOL、レジリエンスに関連することが予想されるが、それらも今後分析してゆきたい。またアジアの他の 7 カ国の分析データとの比較によって、日本の特徴と、アジア全体で共通する因子間構造を見いだしてゆきたい。

日本版カントリーレポート作成メンバー

佐藤朝美（愛知淑徳大学教授）

北野幸子（神戸大学大学院教授）

深見俊崇（島根大学教授）

星三和子（十文字学園女子大学名誉教授）

榊原洋一（C R N 所長、お茶の水女子大学名誉教授）

参考

こども環境学会（2020 中間）「コロナ禍状況の幼稚園・保育園における休園・登園自粛等への対応と子どもたちへの影響に関する調査」

全国保育園保健師看護師連絡会（2020）「新型コロナウイルス感染症対策に関するアンケート」

全国保育協議会・全国保育士会（2020）「新型コロナウイルス感染症への対応等に関する調査結果」

全国私立保育連盟（2020）「新型コロナウイルス感染症に関する調査 1， 2」

全国私立保育連盟（2021）「「新型コロナウイルス感染症に関する調査 2021」 報告書」

全国認定こども園協会(2020)「新型コロナウイルス感染症対策に係るアンケート調査報告書」